

【科目名】	比較言語研究B	Comparative Studies of Language B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	長野明子	
【担当教員】	長野明子	
【授業の目的】	<p>本科目は比較文化専攻の共通科目の1つであり、言語の比較をつうじて国際的俯瞰力を涵養することを目的としている。地球上での言語の使用実態を理解するには、国境を越えた人やモノや情報の移動に注目するのが効果的である。人・モノ・情報の移動から生じる通言語的現象として、言語接触について考察する。</p> <p>DP (ディプロマ・ポリシー) に即した到達目標は次の通りである。</p> <p>(1) 言語接触に関する文献を理解・評価し、内容を正確に報告できる (DP1)。</p> <p>(2) 文献で学んだ研究枠組みを使って仮説を立て、データを収集し、初歩的なデータ分析を行うことができる (DP2)。</p> <p>(3) 外国語で書かれた専門文献を正確に読解することができる (DP3)。</p>	
【授業の方法】	言語接触学についての入門を行う。論文 (電子媒体) とウェブ上の研究用資料を用いて日本語で講義する。受講者は文献を精読しハンドアウトを作って内容報告を行う。授業ではそれを基に批判的検討や発展的討論を行う。教員は専門知識を解説するとともに、外国語能力の涵養という観点からも指導する。論文や研究資料は英語で書かれているものを含む。	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 導入 言語接触学の研究史</li> <li>2 和製英語 身近な借用語を収集する</li> <li>3 語彙表を用いた借用度調査, WALIS</li> <li>4 内容語の伝播と借用 (1)</li> <li>5 内容語の伝播と借用 (2)</li> <li>6 機能的形態素の伝播と借用 (1)</li> <li>7 機能的形態素の伝播と借用 (2)</li> <li>8 討論、仮説とデータ収集</li> <li>9 ミクロネシア地域に見られる日本語からの借用語 (1)</li> <li>10 ミクロネシア地域に見られる日本語からの借用語 (2)</li> <li>11 討論、仮説形成とデータ収集</li> <li>12 英語基盤のクレオール史の歴史と発生</li> <li>13 日本語基盤のクレオール史の歴史と発生</li> <li>14 討論、仮説形成とデータ収集</li> <li>15 総括と今後の課題</li> </ol>	
【履修条件】	学部や大学院で言語学入門の履修していることが望ましいが、必須ではない。	
【評価方法】	学期末レポート50%、授業内演習・課題50%	
【テキスト】	購入の必要な教科書はない。	
【参考書】	『言語の構造と分析—統語論、音声学・音韻論、形態論—』言語研究と言語学の進展シリーズ、開拓社、東京 (2018年) <a href="https://www.kaitakusha.co.jp/book/shinten.html">https://www.kaitakusha.co.jp/book/shinten.html</a>	
【備考】		
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】 可

【科目名】	比較思想研究B	Comparative Studies of Thought B	
【開講時期】	2025年度後期		
【科目責任者】	木澤 景		
【担当教員】	木澤 景		
【授業の目的】	<p>本研究科カリキュラム・ポリシーに定める「コースワーク」を主とする共通科目講座として、比較文化専攻に必要な研究方法論の習得と学術文献理解能力・研究報告能力の開発を目的とする。本講座では履修者全員の修士論文題材から共通課題を設定し、東西の哲学・宗教・倫理思想を広く見わたし、鳥瞰的な視座において各自のテーマの理解を深めることを目指す。2020年度は「正しさ」、2021年度は「戦い」、2022年度は「人間性」、2023年度は「表象」、2024年度は「戯曲」という共通テーマを設定した。本講座を履修することで習得が期待される素養は次の四点である。①「思想」についての理解を深め、各自の修士課程における研究が単なる可視的な現象の羅列にとどまらず、その背後にある因果関係や複数現象間の共通・相違関係などの考察へと至るよう原形イメージを形作る。②主として西洋、インド、中国、朝鮮半島、日本の思想史を扱い、それらの基本的な流れを知識として把握し、自分の興味関心がどこに位置づきものかを理解する。③比較対象となる材料、すなわち文献の断片の探し方を実修し、部分を扱うこと、翻訳文献を扱うことの危険性（と有効性）を踏まえた上で、古典文献を深く読解する経験をつむ。④「比較」の視点、鳥瞰的なものの見方が持つ有効性と危険性を正しく認識し、各自の研究の各段階においてマクロ的な視点を持つべきか・ミクロの視点で掘り下げるべきかを適切に判断できるようになる。</p>		
【授業の方法】	<p>レクチャー形式＋ゼミ形式。講義形式で基礎的な地盤を築いたのち、その題材をめぐってのディスカッションや、その他の材料の調査・提案などを履修者から行ってもらおう。原典資料等はプリントで配布の上、復習用にユニパでも配信する。</p>		
【授業展開】	<p>※参加者の興味関心に基づいて講義展開をそのつど決定していく。以下は一例。            第一回 ガイダンス（受講する上での連絡事項等の告知）（講義形式）            第二回 今学期のテーマ決定（各自の修論テーマ紹介＋ゼミ形式）            （以下、2023年度の例。）            第三回 「良心」の比較思想① ファシリテーターによる問題の整理（ゼミ形式）            第四回 「装い」の比較思想① ファシリテーターによる問題の整理（ゼミ形式）            第五回 「良心」の比較思想② キリスト教思想における「良心」① 『創世記』『新約聖書』（講義形式）            第六回 「装い」の比較思想② 日本文学における「装い」『源氏物語』玉鬘（講義形式）            第七回 「良心」の比較思想③ 日本思想における「良心」林羅山『春鑑抄』伊藤仁斎『童子問』（講義形式）            第八回 「装い」の比較思想③ 西洋哲学における「装い」①プラトン『国家』（講義形式）            第九回 「良心」の比較思想④ 中国思想における「良心」『礼記』『孟子』（講義形式）            第十回 「装い」の比較思想④ 西洋哲学における「装い」②メルロ・ポンティ（講義形式）            第十一回 「良心」の比較思想⑤ キリスト教思想における「良心」② アクィナス『神学大全』（講義形式）            第十二回 「装い」の比較思想⑤ 西洋哲学における「装い」③ジンメル『文化の哲学』（講義形式）            第十三回 「良心」の比較思想⑥ ディスカッション（ゼミ形式）            第十四回 「装い」の比較思想⑥ ディスカッション（ゼミ形式）            第十五回 まとめ（講義形式）</p>		
【履修条件】	<p>教員の時間割等の都合から、開講時限を移動することができない。水曜2限に受講できることを条件とする。</p>		
【評価方法】	<p>授業貢献度60%（発表、発言など）＋期末レポート40%。            期末レポートの評価基準は、①形式面、②説得力、③独自性、④熱意の四点で評価を行う。</p>		
【テキスト】	<p>毎回、プリントを配布する。</p>		
【参考書】	<p>講座の展開に従い、その都度紹介する。</p>		
【備考】			
【社会人聴講生】	<p>応相談。事前に面接を課すので、開講前に木澤（kizawa@u-shizuoka-ken.ac.jp）までメールされたい。</p>	【科目等履修生】	履修可。

【科目名】	文化人類学研究B	Studies in Cultural Anthropology B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	孫曉剛	
【担当教員】	孫曉剛	
【授業の目的】	この授業は、地球環境問題に対する人類学の視角・アプローチ・研究成果を学び、持続可能な発展（SDGs）という21世紀の人類の共通目標に対する人類学の考察を深めることを目的とする。 後期は、地球規模の環境問題の解決に挑戦する環境人類学の理論とアプローチとしての文化生態・歴史生態・政治生態の三つの視角を学び、現代社会生産・消費・暮らし方から、環境問題の解決と持続可能な発展に対する具体的視点と深い理解力をもつようになる。	
【授業の方法】	受講生による文献資料の輪読と発表、特定テーマについてのディスカッション、そして講師によるプレゼンテーション方式の授業を組み合わせる。 原則対面授業、感染状況によって遠隔授業。	
【授業展開】	第1回：イントロダクション 第2回：人間と環境の複合的な相互作用を理解するための「三つの生態学」 第3回：大規模資源開発と地域社会についての事例研究から読み解く 第4回：大規模資源開発と地域社会についてのディスカッション 第5回：資源の所有・利用・分配について事例研究から読み解く 第6回：資源の所有・利用・分配についてのディスカッション 第7回：エネルギー開発と利用について事例研究から読み解く 第8回：エネルギー開発と利用についてのディスカッション 第9回：生産と消費について事例研究から読み解く 第10回：大量生産・大量消費社会についてのディスカッション 第11回：人口問題、都市化と都市環境について事例研究から読み解く 第12回：人口問題、都市化と都市環境についてのディスカッション 第13回：気候変動と災害について事例研究から読み解く 第14回：気候変動と災害についてのディスカッション 第15回：総括：持続可能な発展（SDGs）について考える	
【履修条件】	暮らしと環境・災害・SDGsに関心をもつ学生	
【評価方法】	授業資料の予習（20%）、発表レジュメの作成（30%）、発表（30%）、ディスカッション（20%）から総合して判断する。	
【テキスト】	該当講義の前週に配布する。	
【参考書】	池谷和信編 『地球環境問題の人類学』 世界思想社 2003 M. Dove & C. Carpenter 2007 Environmental Anthropology: A Historical Reader, Blackwell Publishing 内堀基光・本多俊和編 『人類学研究－環境問題の文化人類学－』 放送大学 2010	
【備考】		
【社会人聴講生】	可・要相談	【科目等履修生】 可・要相談

【科目名】	アカデミック・イングリッシュ I B	Academic English I B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	deHaan, Jonathan	
【担当教員】	deHaan, Jonathan	
【授業の目的】	The purpose of this class is for students to develop academic English skills in order to communicate effectively in academic presentations and discussions.	
【授業の方法】	Lectures, analysis exercises, presentations, group discussions, group work, class presentations.	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. Introduction and skill work</li> <li>2. Example seminar analysis</li> <li>3. Seminar 1 (preparation, practice and feedback)</li> <li>4. Seminar 1 (revisions, improvement and reflection)</li> <li>5. Seminar 2 (preparation, practice and feedback)</li> <li>6. Seminar 2 (revisions, improvement and reflection)</li> <li>7. Seminar 3 (preparation, practice and feedback)</li> <li>8. Seminar 3 (revisions, improvement and reflection)</li> <li>9. Seminar 4 (preparation, practice and feedback)</li> <li>10. Seminar 4 (revisions, improvement and reflection)</li> <li>11. Seminar 5 (preparation, practice and feedback)</li> <li>12. Seminar 5 (revisions, improvement and reflection)</li> <li>13. Seminar 6 (preparation, practice and feedback)</li> <li>14. Seminar 6 (revisions, improvement and reflection)</li> <li>15. Demonstrations</li> </ol>	
【履修条件】	Students in this class should have basic English language (speaking, listening, reading and writing) skills. This class will be taught only in English.	
【評価方法】	80% - Class assignments (prepared seminars, presentations and discussions) 20% - Final examination	
【テキスト】	Anderson, K., Maclean, J., & Lynch, T. (2004). Study speaking: A course in spoken English for academic purposes. Cambridge University Press: Cambridge, UK.	
【参考書】	Materials will be distributed in class. Internet and library research will also be required.	
【備考】	<p>This class will be taught primarily in English. Except in cases of absolute emergency, students should plan to attend every lesson.</p> <p>I will make reasonable accommodations for students in terms of learning preferences, material use, technology use and social circumstance on a case by case basis. I will do my best to accommodate all students. I encourage all students to share their concerns with me privately so I can best accommodate their situation.</p>	
【社会人聴講生】	Auditing students are welcome.	【科目等履修生】 Non-degree students are welcome.

【科目名】	スペイン文化研究ⅡB	Studies in Spanish Culture II B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	松森奈津子	
【担当教員】	松森奈津子	
【授業の目的】	歴史上の具体的なトピックとして、16世紀スペインで生じたインディアス問題―「新世界」と「旧世界」のあるべき関係をめぐる諸議論―を取り上げます。本講義においてこのトピックを学ぶことを通じて、人は自分と異なる人間（他者）と出会ったときにどのようにふるまう傾向があるか、またどのように考え行動すれば、よりよい関係を築くことができるのかといったことを他の受講生とともに考え、自分なりの答えが出せるようになります。	
【授業の方法】	下記輪読テキストの報告にコメントを付し、ディスカッションを行う形で進めます。また、自由報告や学外研修の場を設け、幅広い知識を身に着けます。 授業は対面で行いますが、公開セミナー等の回では、また感染症が流行している際には、Zoom（双方向）授業を取り入れます。	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 概論：歴史学におけるインディアス問題</li> <li>2. 概論2：インディアス問題の起源、展開、背景</li> <li>3. 3つの争点：インディアス問題の議論の中心は何か</li> <li>4. 文明と野蛮（争点1）：自分と違う慣習をもつ人間は、劣った人間か</li> <li>5. 同上</li> <li>6. 支配の正当性（争点2）：「他者」をコントロールすることは許されるか</li> <li>7. 同上</li> <li>8. 戦争の合法性（争点3）：「正しい」戦争はあるか</li> <li>9. 同上</li> <li>10. ディスカッション：実際に身近な「他者」と話し合ってみよう</li> <li>11. 同上</li> <li>12. 自由報告：自身の関心のあるテーマについて語ってみよう</li> <li>13. 同上</li> <li>14. 学外研修（外部講師のご都合により前後する可能性あり）</li> <li>15. 総括：インディアス問題の意義と問題点</li> </ol>	
【履修条件】	とくにありません。	
【評価方法】	文献報告（履修人数により、1～2回、全50%）、ディスカッション参加（30%）、学外研修レポート（20%）により、評価します。	
【テキスト】	Natsuko Matsumori, <i>The School of Salamanca in the Affairs of the Indies</i> , 2019. 松森奈津子『野蛮から秩序へ』2009年。 （書籍・報告の準備方法は、初回授業でお伝えします。事前に準備する必要はありません。）	
【参考書】	各回に関連した文献を授業中に紹介します。	
【備考】	とくにありません。	
【社会人聴講生】	応相談	【科目等履修生】 応相談

【科目名】	ヨーロッパ思想研究ⅠB	European ThoughtⅠB
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	松森奈津子	
【担当教員】	松森奈津子	
【授業の目的】	<p>国内秩序に主たる関心をおいてきた政治思想史と、国家間関係を主な分析対象としてきた国際関係論との間には、ながらく学問的な境界がありました。けれども、グローバリゼーションの進展とともに国内外の区別が失われてゆくに伴い、両分野を統合して新たな世界秩序を構想しようとする試みがなされています。</p> <p>本講義では、第二次世界大戦後に英国LSEを拠点としてこの試みを進めてきたイングリッシュスクールに着目し、かれらが議論の俎上に載せた国際関係をめぐる古典的諸理論を考察します。主権国家秩序の生成と発展の過程を追い、その意義と問題点を考察することによって、今後の政治共同体のありかたを模索する一助を得ることを目的としています。</p> <p>具体的には、文献読解、報告、ディスカッション、学外研修など多様なアクティビティを通じ、「グローバル化」時代の越境的秩序形成、維持の現状と今後の可能性について、考えを深めることができるようになります。</p>	
【授業の方法】	<p>下記輪読テキストの報告にコメントを付し、ディスカッションを行う形で進めます。また、自由報告や学外研修の場を設け、幅広い知識を身に着けます。</p> <p>授業は対面で行いますが、公開セミナー等の回では、また感染症が流行している際には、Zoom（双方向）授業を取り入れます。</p>	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 概論：国際関係思想史：イングリッシュスクールの遺産</li> <li>2. 国際関係をめぐる3R：ホブズ、グロティウス、カント</li> <li>3. 普遍主義的構想：ビトリア</li> <li>4. 同上</li> <li>5. 戦争状態からの脱出：ルソー</li> <li>6. 同上</li> <li>7. 自由主義的伝統：スミス</li> <li>8. 同上</li> <li>9. ヨーロッパ・コモンウェルス：バーク</li> <li>10. 同上</li> <li>11. 学外研修（外部講師のご都合により多少の時期変更の可能性あり）</li> <li>12. フリーディスカッション</li> <li>13. 自由報告（自身の研究テーマ）</li> <li>14. フリーディスカッション</li> <li>15. 総括：国際関係論と政治思想史の融合に向けて</li> </ol>	
【履修条件】	とくにありません。	
【評価方法】	報告（履修人数により、1～2回、全50%）、ディスカッション参加（30%）、学外研修レポート（20%）により評価します。	
【テキスト】	<p>押村高、飯島昇蔵訳者代表『国際関係思想史: 論争の座標軸』、新評論、2003年。</p> <p>野口雅弘ほか編『よくわかる政治思想』、ミネルヴァ書房、2021年。</p> <p>（書籍、報告の準備方法については、初回の授業時に伝えます。事前に準備する必要はありません。）</p>	
【参考書】	各回に関連した文献を紹介します。	
【備考】	とくにありません。	
【社会人聴講生】	応相談	【科目等履修生】 応相談

【科目名】	ヨーロッパ思想研究ⅡB	European ThoughtⅡB	
【開講時期】	2025年度後期		
【科目責任者】	橋川 裕之		
【担当教員】	橋川 裕之		
【授業の目的】	<p>本授業の主題は、ジークムント・フロイト（1856-1939年）と彼が創始した精神分析（Psychoanalysis）です。フロイトと精神分析をめぐってはすでに膨大な先行研究があり、新たな視点は打ち出しえないように見えますが、フロイトの著作と彼に関する文献を精読することによって、新たな思想的・文学史的価値を見出すことを目指します。よく知られているように、フロイトはオーストリアの首都ウィーンで生まれ育ったユダヤ人です。彼はウィーン大学医学部に進学し、脳解剖学者として名を成そうと考えましたが、徐々に、自身のユダヤ性と向き合ううちに、関心を解剖学から心理学の領域へとシフトさせます。彼が主著として誇った『夢解釈』（1900年）はいかなる状況で書かれ、彼にとってどのような意味を持っていたのでしょうか。そして、彼は反ユダヤ主義が高まる20世紀ウィーン社会の中で、人間の心の問題にどのような目を向けていたのでしょうか。</p> <p>受講生と教員の双方がテキストをじっくり読み、発表および議論を通じて、これら問いへの理解を深めること、そして、関連する諸問題への独自の考察へ踏み出すことが狙いです。</p>		
【授業の方法】	<p>受講生によるプレゼンテーション、教員と受講生のディスカッション、教員によるレクチャーを組み合わせる形で授業を進めます。授業の方式については、本学における対面を基本としますが、状況により遠隔（Zoom）移行することもあります。</p>		
【授業展開】	<p>後期テーマ： フロイトの著作を翻訳で読む</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 『ヒステリー研究』 i</li> <li>2. 『ヒステリー研究』 ii</li> <li>3. 『夢解釈』 i</li> <li>4. 『夢解釈』 ii</li> <li>5. 『夢解釈』 iii</li> <li>6. 『夢解釈』 iv</li> <li>7. レオナルド・ダ・ヴィンチ論i</li> <li>8. レオナルド・ダ・ヴィンチ論ii</li> <li>9. 『トーテムとタブー』 i</li> <li>10. 『トーテムとタブー』 ii</li> <li>11. 『トーテムとタブー』 iii</li> <li>12. 『モーセと一神教』 i</li> <li>13. 『モーセと一神教』 ii</li> <li>14. 『モーセと一神教』 iii</li> <li>15. まとめ</li> </ol> <p>* 以上はあくまで進行の予定であり、受講者の数や関心により別様に進行することもあります。</p>		
【履修条件】	精神分析の思想的・文学的意義に関心があり、関連する文献を積極的に参照・考察できること。		
【評価方法】	プレゼンテーション課題と期末レポートを50%、50%の割合で評価します。		
【テキスト】	フロイトの著作・日本語訳（開講後に具体的に指示します）。		
【参考書】	フロイトについての伝記、概説書、研究書（必要度の高い文献については、授業展開に応じて具体的に指示します）。		
【備考】	特になし。		
【社会人聴講生】	可（メール等で、事前に担当教員にご相談ください）	【科目等履修生】	可（メール等で、事前に担当教員にご相談ください）

【科目名】	ヨーロッパ文化研究ⅡB	European Culture StudiesⅡB
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	橋川 裕之	
【担当教員】	橋川 裕之	
【授業の目的】	<p>東ローマ（ビザンツ）帝国に関する歴史研究は近年新たな展開を見せている。その中心にいるのは、アンソニー・カルデリス（Anthony Kaldellis）である。彼は膨大なギリシャ語史料の読解に基づき、ビザンツにおけるギリシャ文化の変遷や人々のアイデンティティ、古典文化の継承の特徴などの問題について、次々と研究成果を刊行している。</p> <p>本授業では、彼の近著の一つ、The Byzantine Republic: People and Power in New Romeをテキストとして、古代から中世にかけてローマの「共和政」理念がどのように受け継がれたのかを、受講生が主体的に考察し、理解すること、またそれによって、現代の政治的諸問題へのより客観的な理解を得ることを目的とします</p>	
【授業の方法】	<p>受講生によるプレゼンテーション、教員と受講生のディスカッション、教員によるレクチャーを組み合わせる形で授業を進めます。授業の方式については、本学における対面を基本としますが、状況により遠隔（Zoom）移行することもあります。</p>	
【授業展開】	<p>後期テーマ： ビザンティンの政治思想とその特徴について</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 皇帝の地位i</li> <li>2. 皇帝の地位ii</li> <li>3. 皇帝の地位iii</li> <li>4. 法と秩序i</li> <li>5. 法と秩序ii</li> <li>6. 法と秩序iii</li> <li>7. 民衆の役割i</li> <li>8. 民衆の役割ii</li> <li>9. 民衆の役割iii</li> <li>10. 信仰問題i</li> <li>11. 信仰問題ii</li> <li>12. 信仰問題iii</li> <li>13. 西方との関係i</li> <li>14. 西方との関係ii</li> <li>15. まとめ</li> </ol> <p>以下は出版社による紹介文：  Although Byzantium is known to history as the Eastern Roman Empire, scholars have long claimed that this Greek Christian theocracy bore little resemblance to Rome. Here, in a revolutionary model of Byzantine politics and society, Anthony Kaldellis reconnects Byzantium to its Roman roots, arguing that from the fifth to the twelfth centuries CE the Eastern Roman Empire was essentially a republic, with power exercised on behalf of the people and sometimes by them too. The Byzantine Republic recovers for the historical record a less autocratic, more populist Byzantium whose Greek-speaking citizens considered themselves as fully Roman as their Latin-speaking “ancestors.”</p> <p>Kaldellis shows that the idea of Byzantium as a rigid imperial theocracy is a misleading construct of Western historians since the Enlightenment. With court proclamations often draped in Christian rhetoric, the notion of divine kingship emerged as a way to disguise the inherent vulnerability of each regime. The legitimacy of the emperors was not predicated on an absolute right to the throne but on the popularity of individual emperors, whose grip on power was tenuous despite the stability of the imperial institution itself. Kaldellis examines the overlooked Byzantine concept of the polity, along with the complex relationship of emperors to the law and the ways they bolstered their popular acceptance and avoided challenges. The rebellions that periodically rocked the empire were not aberrations, he shows, but an essential part of the functioning of the republican monarchy.</p> <p>* 以上はあくまで予定であり、受講者の数や構成、興味等により、別様に進行することもあります。</p>	
【履修条件】	東ローマ（ビザンツ）帝国の歴史に興味があり、教科書に指定している英書を手し、毎回10ページ程度の分量を読んで議論の内容を理解できること。	
【評価方法】	プレゼンテーション課題と期末レポートを50%、50%の割合で評価します。	
【テキスト】	具体的にどの文献をテキストにするかは開講後に指示します。	
【参考書】	Anthony Kaldellis, The Byzantine Republic: People and Power in New Rome (Harvard University Press: Cambridge, MA, 2015). ロナルド・サイム『ローマ革命—共和政の崩壊とアウグストゥスの新体制』（上下巻、岩波書店、2013年）。 その他、古代ローマ関連の歴史書・書簡集の翻訳。	
【備考】	特になし。	
【社会人聴講生】	可（メール等で、事前に担当教員にご相談ください）	【科目等履修生】
		可（メール等で、事前に担当教員にご相談ください）

【科目名】	英語意味論研究B	English Semantics B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	田村敏広	
【担当教員】	田村敏広	
【授業の目的】	この授業では、英語という言語の特性について理解を深めるとともに、言語を意味の観点から分析し、考察する力を養うことを目的とする。特に、認知言語学と呼ばれる学問分野からの知見をもとに、具体的な英語表現について意味分析を行う。認知言語学とは、人間の物事の捉え方や認識のあり方を基盤として言語を分析する言語学の分野である。言葉の背後には必ず人間の存在がある。つまり、どのような言語表現であれ、常に人間の物事の捉え方が反映されている。そのような人間の捉え方は言語表現の意味の大きな一部であり、それに注目することで様々な言語現象に対して、より妥当性の高い分析が可能となる。言語学における認知言語学分野の文献を適切に理解・評価し、研究報告を行うことのできる能力、さらにはこの分野の知識と方法論を修得し、文化や言語を比較研究できる視座の修得を目指す。	
【授業の方法】	授業は、英語または日本語で書かれた認知言語学テキストや資料を用いて、ゼミ形式で行う。テキストを用いて認知言語学の理論的理解を深めながら、英語の具体的な言語現象についてディスカッションを行うなど、受講生による主体的な参加を基盤として授業を進める。	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 事態認識・主体化（1）</li> <li>3. 事態認識・主体化（2）</li> <li>4. 文献講読（1）（事態認識関連のものを予定）</li> <li>5. 文献講読（1）</li> <li>6. 文献講読（1）</li> <li>7. 文献講読（2）（主体化関連のものを予定）</li> <li>8. 文献講読（2）</li> <li>9. 文献講読（2）</li> <li>10. 文献講読（3）（履修者選定の文献）</li> <li>11. 文献講読（3）</li> <li>12. 文献講読（3）</li> <li>13. 研究報告（1）（履修者による言語分析報告）</li> <li>14. 研究報告（2）（履修者による言語分析報告）</li> <li>15. 研究報告（3）（履修者による言語分析報告）</li> </ol> <p>- 上記予定は、履修者構成等により調整・変更する可能性があります。  - 文献講読にて実際に扱う文献は履修者の構成と希望に基づいて決定します。  - 履修者選定の文献は、認知言語学関連のものを選んでいただけます。</p>	
【履修条件】	「英語意味論研究A」を履修していることが望ましい。 英語学、特に意味論・語用論に興味のある学生を歓迎します。	
【評価方法】	期末レポート課題（60%）、授業での発表・課題（40%）	
【テキスト】	『認知言語学の基礎』（研究社）	
【参考書】	Cognitive Grammar, John R. Taylor, Oxford University Press 『認知言語学への招待』（大修館）	
【備考】		
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】 可

【科目名】	英語学研究B	English Linguistics B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	田村敏広	
【担当教員】	田村敏広	
【授業の目的】	この授業では、言語学における認知言語学分野の文献を適切に理解・評価し、研究報告を行うことのできる能力、さらにはこの分野の知識と方法論を修得し、文化や言語を比較研究できる視座の修得を目指す。特に、語用論分野における対人語用論に焦点を当て、英語の言語コミュニケーションの背景にある対人調節のしくみ（ポライトネス・インポライトネス）について知識を深めるとともに、言語を対人語用論の観点から分析し、考察する力を養うことを目的とする。	
【授業の方法】	授業は、英語または日本語で書かれた語用論テキストや資料を用いて、ゼミ形式で行う。テキストを用いて語用論の理論的理解を深めながら、英語の具体的な言語現象についてディスカッションを行うなど、受講生による主体的な参加を基盤として授業を進める。	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 対人語用論：インポライトネス（1）</li> <li>3. 対人語用論：インポライトネス（2）</li> <li>4. 対人語用論：インポライトネス（3）</li> <li>5. 文献講読（1）（インポライトネス関連論文 1）</li> <li>6. 文献講読（1）</li> <li>7. 文献講読（1）</li> <li>8. 文献講読（2）（インポライトネス関連論文 2）</li> <li>9. 文献講読（2）</li> <li>10. 文献講読（2）</li> <li>11. 文献講読（3）（履修者選定による論文）</li> <li>12. 文献講読（3）</li> <li>13. 文献講読（4）（履修者選定による論文）</li> <li>14. 文献講読（4）</li> <li>15. 文献講読（4）</li> </ol> <p>- 上記予定は、履修者構成等により調整・変更する可能性があります。  - 文献講読にて実際に扱う文献は履修者の構成と希望に基づいて決定します。  - 履修者選定による論文は、対人語用論関係のものを選んでいただきます。</p>	
【履修条件】	英語学、特に語用論に興味のある学生を歓迎します。	
【評価方法】	期末レポート課題（60%）、授業での発表・課題（40%）	
【テキスト】	『語用論のすべて』（開拓社）	
【参考書】	Impoliteness, Jonathan Culpeper, Cambridge University Press Aspects of Linguistic Impoliteness, D. James and M. Jobert, CSP	
【備考】		
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】 可

【科目名】	英語統語論研究B	Studies in English Syntax B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	須田孝司	
【担当教員】	須田孝司	
【授業の目的】	本講座では、言語分析能力を身につけるため、生成文法理論にもとづく言語構造について理解する。さらに英語とほかの言語の構造的な類似点や相違点に着目し、第二言語として英語を学ぶ際の容易さや困難さについて推測できるセンスを身につける。	
【授業の方法】	授業は演習形式で進める。受講者はテキストや関連する文献を読むだけでなく、構造について分析し、発表、及びディスカッションを行う。  授業は対面で行う。	
【授業展開】	<p>テキストに沿って授業を進める。担当者は自分の担当箇所について要旨をまとめ、発表する。また、担当者以外の受講生は、該当箇所を読んだ上で授業に臨み、質問できるよう準備しておく。なお、この授業で扱うテーマは以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 主要部移動（概観）</li> <li>2. 主要部移動の比較</li> <li>3. 演算子</li> <li>4. 否定</li> <li>5. 練習問題</li> <li>6. Wh移動（概観）</li> <li>7. Wh移動の比較</li> <li>8. 主語疑問文</li> <li>9. コピー形成</li> <li>10. 制約</li> <li>11. 練習問題</li> <li>12. Aバー移動（概観）</li> <li>13. 関係節</li> <li>14. 先行詞繰り上げ</li> <li>15. 練習問題</li> </ol>	
【履修条件】	特になし	
【評価方法】	要旨・発表50%、課題50%	
【テキスト】	初回の授業で指示する。	
【参考書】	英語構文を分析する(下) (Andrew Radford (2020)、開拓社) 英語の主要構文 (中村・金子 (2002)、研究社)	
【備考】		
【社会人聴講生】	社会人聴講生可	【科目等履修生】 科目等履修生可

【科目名】	外国語教育研究B	Foreign Language Education B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	須田孝司	
【担当教員】	須田孝司	
【授業の目的】	外国語を教えるためには、教える側が目標とする外国語の知識を身につけるだけでは不十分であり、学習者がどのように外国語を身につけるのか知っておく必要がある。そのため、本講座では、これまでの国内外の第二言語（外国語）習得研究の流れを踏まえ、英語指導とその効果について批判的に検証する能力を身につける。	
【授業の方法】	授業は演習形式で行う。受講生は担当する箇所について発表し、これまでの研究で何がわかり何がわかっていないか議論する。 授業は対面で行う。	
【授業展開】	<p>テキストに沿って授業を進める。担当者は自分の担当箇所について要旨をまとめ、発表する。その際、ディスカッショントピックも用意する。また、担当者以外の受講生は、該当箇所を読んだ上で授業に臨み、質問できるよう準備しておく。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 訂正フィードバックの影響</li> <li>2. 英語を英語で教えることに関する調査研究</li> <li>3. 英語学習におけるファシリテーション技術の活用</li> <li>4. 脳機能計測で探る第二言語習得</li> <li>5. リーディングとインタラクション</li> <li>6. リーディング指導におけるメタ認知</li> <li>7. リスニング攻略</li> <li>8. 発話タスクとスピーキング能力</li> <li>9. 分詞構文の指導者文法</li> <li>10. 国際英語とコミュニケーション方略</li> <li>11. 中学校英語教科書にみられるポライトネス</li> <li>12. アクティブラーニングにおける内容重視型指導</li> <li>13. 小学校外国語活動におけるCLIL型授業</li> <li>14. 音声に対する明示的指導</li> <li>15. 英語能力テスト</li> </ol>	
【履修条件】	言語・言語習得・言語教育に興味のある学生。	
【評価方法】	要旨・発表60%、授業への貢献度20%、レポート20%	
【テキスト】	『第二言語習得と英語教育の新展開』（尾島・藤原（編）. 2020. 金星堂）	
【参考書】	『はじめての英語教育研究』（浦野・亘理・田中・藤田・高木・酒井. 2016. 研究社）	
【備考】		
【社会人聴講生】	社会人聴講生可	【科目等履修生】 科目等履修生可

【科目名】	言語機能論研究B	Functional Linguistics B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	長野明子	
【担当教員】	長野明子	
【授業の目的】	<p>ことばの意味や機能を重視した語形成論を行う。語彙意味論・統語論・語用論の諸概念を使って日英語の語形成現象を記述・分析し、なぜそのような現象が可能なのかを説明できるようになる。身近なことばを観察し、仮説を立てて分析する楽しさを知ることができる。</p> <p>DP (ディプロマ・ポリシー) に即した到達目標は次の通りである。</p> <p>(1) 語の文法について文献に即して理解・評価し、内容を正確に報告できる (DP1)。</p> <p>(2) 教科書の仮説モデルに従ってコーパスで事実観察を行い、初歩的なデータ分析をすることができる (DP2)。</p> <p>(3) 外国語で書かれた専門文献を正確に読解することができる (DP3)。</p>	
【授業の方法】	指定の教科書(紙媒体)と電子コーパスを用いて日本語で講義する。受講者は予習では教科書で基本知識を学び、授業では受講生の内容報告とその発展・展開を検討する。教員は専門知識を解説するとともに、外国語能力の涵養という観点からも指導する。	
【授業展開】	<p>授業展開 進度は受講生の前提知識や理解度によって調整する。以下はおおよその展開予定である。</p> <p>1 導入 前期学修内容について</p> <p>2・3回 接辞付加の規則性と順序</p> <p>3・4回 接辞付加による派生語の意味</p> <p>5・6回 複雑語の形成と項構造</p> <p>7回 コーパスを用いた演習</p> <p>8・9回 動詞由来の複合語</p> <p>10・11回 動詞+動詞の複合語</p> <p>12回 コーパスを用いた演習</p> <p>13・14回 統語論と形態論のインターフェイス</p> <p>15回 総括と今後の課題</p>	
【履修条件】	今年度の「言語機能論研究A」を受講していることが好ましい。	
【評価方法】	学期末レポート50%、授業内演習・課題50%	
【テキスト】	『語の文法へのいざない』由本陽子・杉岡洋子・伊藤たかね著、2023年、ひつじ書房、東京。 <a href="https://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-8234-1259-2.htm">https://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-8234-1259-2.htm</a>	
【参考書】	『最新英語学・言語学用語辞典』開拓社、東京(2015年) <a href="https://www.kaitakusha.co.jp/book/book.php?c=2215&amp;l=ja">https://www.kaitakusha.co.jp/book/book.php?c=2215&amp;l=ja</a>	
【備考】	英語教員専修プログラムや日本語教員養成プログラムの科目として履修する場合は、A・Bの順で履修する必要がある(履修要項参照)。	
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】 可

【科目名】	国際開発研究ⅡB	International Development StudiesⅡB	
【開講時期】	2025年度後期		
【科目責任者】	飯野 光浩		
【担当教員】	飯野 光浩		
【授業の目的】	現在、中国などの新興国や途上国の開発問題は経済学、政治学、社会学など様々な分野から研究・分析されている。本講義では開発を主に貧困からの脱却と捉えて、途上国・新興国の開発に関する諸問題を経済学、特に開発経済学の観点から学習していく。その過程を通じて、途上国の経済開発の諸課題を認識して論理的に理解し、その課題の本質を的確に見極めることができるようにすることが、目的である。		
【授業の方法】	基本的には、受講生の研究テーマや修論テーマを踏まえた論文の輪読形式である。つまり、受講生の希望を聞いた上で、それに沿ったテーマに関連する途上国経済の開発に関する論文や資料を読み込み、その内容をパワーポイントで発表する。その発表を踏まえて、議論を展開していく。 但し、適宜、受講者の修論テーマや研究テーマについてもパワーポイントで発表してもらう。詳細は授業展開を参照のこと。		
【授業展開】	受講者と適宜相談して、スケジュールを調整する。 以下は過去の例である。参考として示すが、あくまで受講生の希望に応じて、柔軟に対応する。  第1回 ガイダンス、国際開発研究ⅡAの復習 第2回 修論中間発表の準備もしくは研究テーマに関するプレゼンとディスカッション 第3回～第4回 開発経済学の応用（受講者の修論テーマや研究テーマに対応した）に関する論文その1 第5回～第6回 開発経済学の応用（受講者の修論テーマや研究テーマに対応した）に関する論文その2 第7回～第8回 開発経済学の応用（受講者の修論テーマや研究テーマに対応した）に関する論文その3 第9回～第10回 開発経済学の応用（受講者の修論テーマや研究テーマに対応した）に関する論文その4 第11回 修士論文の進捗状況や自分の研究テーマに関するプレゼンとディスカッション 第12回～第13回 開発経済学の応用（受講者の修論テーマや研究テーマに対応した）に関する論文その5 第14回～第15回 修士論文や自分の研究テーマに関するプレゼンとディスカッション		
【履修条件】	BRICSなどの新興国や途上国経済の発展に関心があること。 学部生レベルのミクロ経済学、マクロ経済学、計量経済学の理解があること。		
【評価方法】	講義中の発表・発言や議論、修論テーマや研究テーマに関するプレゼンを総合評価して決定する。 具体的割合は講義中の発表・発言20%、議論30%、テーマに関するプレゼン50%である。		
【テキスト】	受講生の研究テーマに即して、適宜、配布・紹介する。 一例として、過去に取り上げた論文を2つ挙げる Melanie Beresford(2008)"Doi Moi in Review: The Challenges of Building Market Socialism in Vietnam", Journal of Contemporary Asia, Vol.38, No.2, 221-243pp World Bank(2002)"Building Institutions for Markets", World Development Report 2002, Chapter5		
【参考書】	特になし		
【備考】	本講義の履修を希望する学生は、10月の初回講義日の前日までに、自分の研究テーマや修士論文のテーマ、関心のあるテーマをE-mail (iino@u-shizuoka-ken.ac.jp) で連絡すること。 教材選びの参考にする。  授業形態について 対面授業のみの形式で実施する		
【社会人聴講生】	可 但し、本講義を履修するのに必要な基礎知識を確認するため、以下の条件を課す。 条件) 1) 学部生レベルの経済学に関する試験を実施する。 2) 本講義では、主に英語文献を使用し、英語で議論する必要があるため、必要な英語力を確認する試験を実施する。  その試験で基礎知識が習得されていると確認されれば、履修できる。	【科目等履修生】	可 但し、本講義を履修するのに必要な基礎知識を確認するため、以下の条件を課す。 条件) 1) 学部生レベルの経済学に関する試験を実施する。 2) 本講義では、主に英語文献を使用し、英語で議論する必要があるため、必要な英語力を確認する試験を実施する。  その試験で基礎知識が習得されていると確認されれば、履修できる。

【科目名】	国際経済学研究ⅠB	Studies in International EconomicsⅠB
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	小塚英治	
【担当教員】	小塚英治	
【授業の目的】	近年の経済学においては、ランダム化比較試験（Randomized Control Trial: RCT）などの手法を用いて政策やプロジェクトの有効性を科学的に検証する因果推論の研究が大きなトレンドとなっています。「国際経済学研究Ⅰ」では、因果推論の概念や計量経済学を用いた基礎的な手法を理解し、開発経済学・国際経済学の実証分析の論文の内容を理解する能力を身に付けることを目的とします。後期（B）では因果推論の手法を用いた実証分析の結果をまとめた書籍や実証分析の論文を講読します。	
【授業の方法】	担当教員による講義、履修者による発表を行い、議論をします。履修者は毎回、指定された文献を事前に読み、議論に参加することが求められます。	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 文献講読 『貧困と闘う知』 第1章 教育——通わせるか、学ばせるか</li> <li>3. 文献講読 『貧困と闘う知』 第2章 健康——行動と制度</li> <li>4. 文献講読 『貧困と闘う知』 第3章 マイクロファイナンスを問い直す</li> <li>5. 文献講読 『貧困と闘う知』 第4章 ガバナンスと汚職</li> <li>6. 文献講読 『貧困と闘う知』 まとめ</li> <li>7. 文献講読 実証分析の論文1</li> <li>8. 文献講読 実証分析の論文2</li> <li>9. 文献講読 実証分析の論文3</li> <li>10. 文献講読 実証分析の論文4</li> <li>11. 履修者選定の文献・研究の紹介1</li> <li>12. 履修者選定の文献・研究の紹介2</li> <li>13. 履修者選定の文献・研究の紹介3</li> <li>14. 履修者選定の文献・研究の紹介4</li> <li>15. まとめ</li> </ol> <p>-上記予定は、履修者構成等により調整・変更する可能性があります。 -候補例の文献の情報は「テキスト」参照。ただし実際に扱う文献は履修者の構成と希望に基づいて決定します。 -履修者選定の文献は、各人の研究テーマを踏まえて選んでもらいます。</p>	
【履修条件】	国際経済学研究ⅠAを受講済であること、ミクロ経済学及び計量経済学の基礎知識があることが望ましい。	
【評価方法】	口頭発表（60%）、討議参加状況（40%）により評価する。	
【テキスト】	<p>以下の文献が候補として考えられるが、受講者と相談して決定する。</p> <p>&lt;書籍&gt;            エステル・デュフロ（2017）『貧困と闘う知 教育、医療、金融、ガバナンス』みすず書房            アビジット・V・バナジー（著）、エステル・デュフロ（著）、村井章子（翻訳）（2020）『絶望を希望に変える経済学: 社会の重大問題をどう解決するか』日経BP</p> <p>&lt;論文&gt;            ・Banerjee, A., Duflo, E., Glennerster, R., &amp; Kinnan, C. (2015). The miracle of microfinance? Evidence from a randomized evaluation. <i>American Economic Journal: Applied economics</i>, 7(1), 22-53.            ・Cohen, J., &amp; Dupas, P. (2010). Free distribution or cost-sharing? Evidence from a randomized malaria prevention experiment. <i>The Quarterly Journal of Economics</i>, 125(1), 1-45.            ・Duflo, A., Kiessel, J., &amp; Lucas, A. M. (2024). Experimental evidence on four policies to increase learning at scale. <i>The Economic Journal</i>, 134(661), 1985-2008.            ・Dupas, P., &amp; Jain, R. (2024). Women left behind: gender disparities in utilization of government health insurance in India. <i>American Economic Review</i>, 114(10), 3345-3383.</p>	
【参考書】		
【備考】	開発援助機関で実務経験のある教員が、現実のプロジェクトの計画や評価に関わった経験をもとに授業を行います。	
【社会人聴講生】	可（事前に担当教員に相談すること）	【科目等履修生】 可（事前に担当教員に相談すること）

【科目名】	国際行動研究B	International Behavior Studies B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	高畑 幸	
【担当教員】	高畑 幸	
【授業の目的】	<p>&lt;授業概要&gt;          国境を超える女性の移動          20世紀後半から、アジア各地において国境を超える女性の移動が顕在化した。大きく分けて結婚移民（外国で居住する男性との結婚による国際移動）と、出稼ぎ労働である。特に後者は1990年代から「移民の女性化」として、出身家族および母子関係を大きく変えるものとされ、社会問題化した。本科目では、結婚移民および家事労働者や介護労働者等として外国で働く女性たちとその家族の葛藤に関する文献の輪読から、この課題への理解を深めることを目的とする。</p> <p>&lt;到達目標&gt;          ・結婚移民および国際労働力移動に関する理解を深める。          ・移民の女性化の概念および課題に関する理解を深める。          ・現在の国際人口移動に関する事例を一つ取り上げて資料を作成し、プレゼンテーションをできるようにする。</p>	
【授業の方法】	<p>&lt;授業方法&gt;          ・テキストの輪読と受講生による関連文献の紹介          ・各自の研究報告と質疑応答。          ・対面を原則とするが、受講生の希望により対面・遠隔併用も可能。</p>	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. テキストの輪読1（レジュメ作成による報告）"Chapter 1. A Very Tiny Problem"</li> <li>3. テキストの輪読2 "Chapter 2. Ethnography and Everyday Life"</li> <li>4. テキストの輪読3 "Chapter 3. Women"</li> <li>5. テキストの輪読4 "Chapter 4. Men"</li> <li>6. テキストの輪読5 "Chapter 5. Sex and Babies"</li> <li>7. テキストの輪読6 "Chapter 6. Wives and Workers"</li> <li>8. テキストの輪読7 "Chapter 7. Asylum Seekers and Overstayers"</li> <li>9. テキストの輪読8 "The Migratory Cycle of Atonement"</li> <li>10. テキストのまとめ</li> <li>11. 受講生による関連文献および事例の紹介1（日本語文献も可、レジュメ作成による報告）</li> <li>12. 受講生による関連文献および事例の紹介2</li> <li>13. 受講生による関連文献および事例の紹介3</li> <li>14. 受講生による関連文献および事例の紹介4</li> <li>15. 受講生による関連文献および事例の紹介5</li> </ol>	
【履修条件】	特になし	
【評価方法】	授業への参加（発言、レジュメ作成による報告、質疑応答）50%、レポート50%。	
【テキスト】	Constable, Nicole, 2014, Born Out of Place: Migrant Mothers and the Politics of International Labor, Berkeley: University of California Press.	
【参考書】	落合恵美子・赤枝香奈子編、2012、『アジア女性と親密性の労働』京都大学学術出版会 安里和晃、2018、『国際移動と親密圏』京都大学学術出版会	
【備考】		
【社会人聴講生】	受入れ可。	【科目等履修生】 受入れ可。

【科目名】	国際社会研究ⅢB	Studies in International Society III B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	二羽泰子	
【担当教員】	二羽泰子	
【授業の目的】	マイノリティ研究において重要な理論や調査方法を、自らの研究関心と結びつけて検討・応用できる。	
【授業の方法】	主に演習形式で行う。受講生は、設定された文献を読み、順番に要約レジュメを作成し発表する。また、その内容に関連するディスカッションを通じて内容を検討する。	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション、受講生の研究関心とのすりあわせ</li> <li>2. 不平等に関する文献購読1（予定：Anya Ahmed, Lorna Chesterton and Deirdre Duffy, 2023, "Social inequalities, Sage Publication.) Introduction</li> <li>3. 同書 Chapter 1</li> <li>4. 同書Chapter 2</li> <li>5. 同書Chapter3</li> <li>6. 同書Chapter4</li> <li>7. 同書Chapter5</li> <li>8. 同書 Chapter6</li> <li>9. 同書 Chapter7</li> <li>10.同書 Chapter8</li> <li>11. 同書 Chapter9</li> <li>12. 同書 Chapter10</li> <li>13. 受講生選択のマイノリティに関わる講読文献（例）Christop Bondy, Voice, Silence, and Self: Negotiations of Buraku Identity in Contemporary Japan.</li> <li>14. 同書2回目</li> <li>15. 同書3回目</li> </ol>	
【履修条件】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい理論を学ぶ意欲があること</li> <li>・英語文献を読む意欲があること</li> </ul>	
【評価方法】	課題文献の理解（要約レジュメや授業中の発表等により判定）30%、授業への参加度（自らの発表、他の発表の際のディスカッションや質疑応答などへの貢献度により判定）40%、扱った理論・方法論の応用（授業における課題や発言の内容により判定）30%	
【テキスト】	適宜指定する	
【参考書】	<p>Tomas Boronski and Nasima Hassan, <i>Sociology of Education</i>, published by SAGE imprint in 2015.  （教育に特化してはいるが、社会学の基礎的な理解とともに、マイノリティグループに関わる批判的理論が多く紹介されている読みやすいテキスト。クリティカル・ペダゴジー、クリティカル・レイスセオリー、多文化主義、ジェンダー役割、障害学、子ども学などに関して、教育を主な対象としながら初学者向けに解説されている。マイノリティに関わる重要な議論が網羅されているため、分析対象が教育であってもかまわない方には全体を通してお勧めできる書。）</p> <p>Carol Thomas, 2007, "Care and Dependency: A Disciplinary Clash", <i>Sociologies of Disability and Illness</i>.  （医療社会学が主張してきたケアが必要な依存する存在としての障害者観に対し、障害学では、健常者中心の社会によって、障害者のみがケアを要する依存的存在たらしめられてきたとする障害者観を提示し、両者は激しく対立してきた。「ケアと依存」をめぐるそのような対立には、ケアする者としての女性に関する問題を議論したフェミニズムや、現代社会を席卷する資本主義あるいはネオリベラリズムの議論も深く関連している。著者は、なぜ両者の主張がかみ合わないのか、接点を見いだす契機があったのではないかという視点から、論争の場面を分析している。）</p> <p>Joshua Gamson, "Must Identity Movements Self-Destruct? A Queer Dilemma", published in <i>Social Problems</i> Vol. 42, No. 3, pp. 390-407, 1995.  （ケアをめぐるのは、集団的アイデンティティカテゴリを強調し、権利を獲得してきた社会運動の立場と、構築されてきた二項対立的なアイデンティティカテゴリを脱構築しなければ問題の根本にアプローチできないとする立場という二つの対立した立場があり、ジレンマとなっている。社会運動において当たり前に論じられてきた集団的アイデンティティであるが、ケアにおける社会運動は、これまでの社会運動論に新たな問題を提起している。）</p> <p>Rita Dhamoon, <i>Identity/Difference Politics: How Difference Is Produced, and Why It Matters</i>, published by UBC Press in 2009.  （多文化主義におけるマイノリティは、支配的な文化に基づいて恣意的に解釈されてきた。一方本書では、マイノリティの実践を、自らの差異に異なる意味を与える戦略的な実践として解釈することで、異なるマイノリティ像を描き出すことを目指している。）</p> <p>Olivia U. Rutazibwa and Robbie Shilliam(ed.), <i>Routledge Handbook of Postcolonial Politics</i>, published by Routledge in 2018.  （人種・民族研究、国際開発学、ジェンダー研究、政治哲学等で繰り広げられてきた西洋的な議論が見逃してきた、あるいは生み出してきた植民地時代以降のマイノリティについて、異なる国・地域の異なるマイノリティの視点から議論している。）</p> <p>フランツ・ファノン、1951（=1998 海老坂武訳）、『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房。  （黒人として否応なしに経験する排除や差別が、いかなる論理で成り立ち、いかにして正当化されていくのかについて、自らの経験を通して分析する）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・岸 政彦・石岡 文昇・丸山 里美著 『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』</li> <li>・マッツ・アルヴェッソン・ヨルゲン・サンドバーグ著、佐藤郁哉訳『面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスチョンの作り方と育て方：論文刊行ゲームを越えて』</li> </ul>	

【備考】	・受講生の研究関心などに応じて授業内容を変更することがある。 ・初回授業で授業の進め方について相談するため、特別な事情がない限り初回の授業から出席すること。		
【社会人聴講生】	初めての場合は要事前面談。専門的な文献を読みこなすうえで必要な基礎的知見を有すること。現役学生中心に授業を進行することについて了承していること。	【科目等履修生】	要事前面談。専門的な文献を読みこなすうえで必要な基礎的知見を有すること。

【科目名】	国際社会研究IVB	Studies in International Society IV B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	湖中真哉	
【担当教員】	湖中真哉	
【授業の目的】	<p>この授業は、異文化や海外にかかわる人文・社会科学的研究に必要な文化人類学の専門的知識を習得し、幅広いテーマに触れながら、その考え方を専門的に深めることを目的とする。文化人類学は、人類を生物学的な側面から研究する自然人類学に対して、人類を文化的な側面から研究する研究分野である。異文化の小規模な集団を対象としたフィールドワークをおもな研究方法としており、社会、文化、政治、経済、宗教、ジェンダー、民族等、極めて幅広い領域を総合的、多面的に扱う包括的アプローチ(holistic approach)を特色とする。学史的には、世界各地の文化の違いをいかにして理解するのかについて議論を蓄積してきたが、研究の対象は多様に拡がっており、現在では、世界各地の地域社会において多種多様なテーマで研究が進められている。とりわけ、国際社会や海外を対象とした研究や実践において、異文化に対する配慮を欠くと、様々な衝突が発生してしまうため、国際社会の研究のためには、文化人類学的な考え方に習熟しておく必要がある。</p> <p>この授業では、担当教員も1章を執筆した文化人類学の近年の教科書（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』ミネルヴァ書房、2018年）を輪読しながら、1) 文化人類学の基本的な概念や学史について把握し、その潮流の中で、2) 現在の文化人類学がどのような現代的課題を扱い、どのようにそれらの課題についてアプローチしているのかについて習得する。また、3) 多様なテーマに共通する文化人類学的な考え方について理解と考察を深めることを主目的とする。</p>	
【授業の方法】	<p>授業の進行方法は演習形式による。まず初回の授業ではオリエンテーションを行う。レジュメの作成方法や質疑応答の方法についても説明する。第2回から第14回までの授業では、報告担当者を決め、担当報告者が教科書の各章を要約して発表する。報告担当章はその章の重要度を勘案しながら、できるだけ受講生が関心をもっているテーマと合致する章に決める。その後、受講生各自がよく理解できなかった箇所を確認し、それに対して担当教員が補足的な講義を行って解説する。そして受講生と担当教員で討論を行う。第15回は、受講生が修得したことをもとに全体討論を行う。教科書の水準はかなり専門的で、初学者には難解と思われるが、各回の授業では良く理解できなかった箇所がどこかを明らかにしておくことが求められる。</p>	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2. 文化相対主義と現代（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第1章）</li> <li>3. 文化と経済（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第4章）</li> <li>4. 家族と親族（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第5章）</li> <li>5. ジェンダーとセクシュアリティ（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第6章）</li> <li>6. 同時代のエスニシティ（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第7章）</li> <li>7. 政治・紛争・暴力（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第9章）</li> <li>8. 宗教と世界観（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第10章）</li> <li>9. グローバリゼーションと移動（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第13章）</li> <li>10. 開発と文化（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第14章）</li> <li>11. 観光と文化（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第15章）</li> <li>12. フィールドワーク論（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第17章）</li> <li>13. 認識論と存在論（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第23章）</li> <li>14. 日本研究の現在——医療人類学の視点から（桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』第24章）</li> <li>15. 総合討論 授業総括</li> </ol> <p>- 上記予定は、履修者構成、および履修者の希望に応じて、調整・変更する可能性がある。</p>	
【履修条件】	<p>現在の文化人類学について学び、その考え方を修得したいという意欲を有していること。履修条件ではないが、国際社会研究IVAを受講していない受講生は、既に受講している学生に理解が追いつくように、より一層の自習が求められる。</p>	
【評価方法】	<p>各回の口頭発表（60%）、討議参加状況（40%）により評価する。</p>	
【テキスト】	<p>桑山敬己・綾部真雄（編）『詳論文化人類学』ミネルヴァ書房、2018年。  <a href="https://www.minervashobo.co.jp/book/b333363.html">https://www.minervashobo.co.jp/book/b333363.html</a></p>	
【参考書】	なし	
【備考】		
【社会人聴講生】	面談あり	【科目等履修生】

【科目名】	国際法研究ⅡB	International Law II B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	石川 義道 (Yoshimichi Ishikawa)	
【担当教員】	石川 義道 (Yoshimichi Ishikawa)	
【授業の目的】	<p>国際通商（貿易）が世界貿易機関（WTO）や自由貿易協定（FTA）によって法的にどのように規律されているかの基本を理解することで、国際通商が直面する現代的課題とは何か、それをどのように解決していけばよいのかという問題について考えていくことを目的とする。</p> <p>The purpose of this course is to develop one's own perspective on what the modern challenges of international trade are and how to address them by understanding the basics of how international trade is legally regulated by the World Trade Organization (WTO) and free trade agreements (FTAs).</p>	
【授業の方法】	<p>受講生による報告・ディスカッションと教員による講義・解説を併用する。対面形式で授業を行う。</p> <p>The class consists of student presentations, discussions, as well as lectures led by the instructor. The classes are conducted in person.</p>	
【授業展開】	<p>1 イントロダクション (Introduction)  2 国際通商とWTO法 (Chapter 1: International Trade and the Law of the WTO)  3-4 世界貿易機関 (Chapter 2: The World Trade Organization)  5-7 最恵国待遇 (Chapter 4: Most-Favoured-Nation Treatment)  8-10 内国民待遇 (Chapter 5: National Treatment)  11-12 関税障壁 (Chapter 6: Tariff Barriers)  13-14 非関税障壁 (Chapter 7: Non-Tariff Barriers)  15 講義のまとめ (Summary of all lectures in the first semester)</p> <p>- The chapter number above is from the class textbook.</p>	
【履修条件】	<p>授業の内容を理解し、議論についていくための最低限の英語力が求められる（基本的なもので構わない）。</p> <p>A minimum level of English is required to understand the content of the class and keep up with discussions (basic proficiency is fine).</p>	
【評価方法】	<p>期末レポートと平常点をベースに評価する。</p> <p>Grades are evaluated based on final reports and regular scores.</p>	
【テキスト】	Peter Van den Bossche & Werner Zdouc, The Law and Policy of the World Trade Organization: Text, Cases, and Materials (Cambridge University Press, 2022).	
【参考書】	World Trade Organization, The Legal Texts (Cambridge University Press, 1999).	
【備考】	<p>授業は英語のテキストを使用して英語で行われるので注意すること。</p> <p>There is nothing in particular, but please be aware that classes will be conducted in English.</p>	
【社会人聴講生】	聴講可。 Attendance is permitted.	【科目等履修生】 聴講可。 Attendance is permitted.

【科目名】	地域研究B	Studies in Regional Countries B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	山本健介	
【担当教員】	山本健介	
【授業の目的】	この授業の目的は、地域研究の「手本」となる優れた作品を読み込むことで、履修者が良質な研究業績を生産できるようになることです。とりわけこの授業では、中東、アフリカ、南アジアなど非欧米圏の政治、社会、文化について論じた研究業績を中心に扱います。	
【授業の方法】	授業は日本語の文献講読と履修者による発表を中心に進める予定ですが、履修者の関心や要望に応じて英語の文献を扱う場合もあります。	
【授業展開】	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス：講読文献・発表の割り当て</li> <li>2. 講読 [概説] 「国家とは何か」『国家の社会学』</li> <li>3. 講読 [概説] 「国家とナショナリズム」『国家の社会学』</li> <li>4. 講読 [概説] 「国家のグローバル化」『国家の社会学』</li> <li>5. 講読 [中東] 「中東・アラブ地域におけるナショナリズム」『ナショナリズム論・入門』</li> <li>6. 講読 [中東] 「イスラーム主義運動の歴史的展開」『中東の新たな秩序』</li> <li>7. 講読 [中東] 「イスラーム復興」『大学生・社会人のためのイスラーム講座』</li> <li>8. 講読 [アフリカ] 「紛争」「崩壊国家」『アフリカ安全保障論入門』</li> <li>9. 講読 [アフリカ] 「アフリカの紛争解決に向けて」『地域研究』Vol.9 No.1</li> <li>10. 講読 [アフリカ] 「実体と虚構のはざまを生きる」『地域研究のアプローチ』</li> <li>11. 講読 [南アジア] 「分割の亡霊」『21世紀の政治と暴力』</li> <li>12. 講読 [南アジア] 「差別解消の方法とヴィジョン」『現代インド1』</li> <li>13. 講読 [南アジア] 「文化」『ようこそ南アジア世界へ』</li> <li>14. 個人研究発表：地域研究的視点の活用について</li> <li>15. 講義のまとめ（個人研究発表予備日）</li> </ol>	
【履修条件】	地域研究Aを履修していることが望ましいです。	
【評価方法】	授業内の講読・発表：100%	
【テキスト】	『国家の社会学』 『ナショナリズム論・入門』 『中東の新たな秩序』 『大学生・社会人のためのイスラーム講座』 『アフリカ安全保障論入門』 『地域研究』（雑誌） 『地域研究のアプローチ』 『21世紀の政治と暴力』 『現代インド1』 『ようこそ南アジア世界へ』	
【参考書】	特になし。	
【備考】	特になし。	
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】 可

【科目名】	東南アジア民族学研究B	Ethnology of Southeast Asia B
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	米野みちよ (YONENO-REYES, Michiyo)	
【担当教員】	米野みちよ (YONENO-REYES, Michiyo)	
【授業の目的】	<p>1. 東南アジアの文化と社会に関する良質の日本語及び英語の文献を読み、文化人類学を中心とした学際的地域研究の枠組みから、東南アジアの文化を理解する。特に、植民地の歴史や近代国家の成立の歴史を踏まえて、文化の諸相を学ぶ。</p> <p>2. 受講者各自の研究テーマや関心をもったテーマで小論文を書く。また、そのための研究計画書を作成する。これらを通して、適切な文献の探し方・読み方、引用方法、研究方法、筋道の立った学問的な論理の構築、そして、文章の書き方を身につける。</p> <p>3. 上記の成果について、口頭発表を行う。伝わりやすい図表等の作成など、研究成果をよりわかりやすく伝えるスキルを身につける。</p> <p>***</p> <p>1. To read high-quality Japanese and English literature on Southeast Asian culture and society to understand Southeast Asian culture from the framework of interdisciplinary area studies. In particular, students will study various aspects of culture in the context of the history of colonialism and the establishment of modern nations.</p> <p>2. To write an essay on a theme of each student's own research or interest. In the process, students will prepare a research plan for this purpose. Through these activities, students will learn how to find, read, and cite appropriate literature, how to identify appropriate research method, how to construct a coherent academic logic, and how to write an academic essay.</p> <p>3. To render an oral presentation of the above results, with acquired skills in communicating research results more clearly with the audience, including the creation of easy-to-understand figures and tables, etc.</p>	
【授業の方法】	<p>講読、口頭発表、小論文研究計画作成、小論文草稿添削 (状況に応じて遠隔授業(双方向性オンライン授業)を行うことがある。)</p> <p>***</p> <p>Reading, oral presentations, essay research planning, correction of essay drafts (Interactive online classes) may be conducted depending on the situation.)</p>	
【授業展開】	<p>1. オリエンテーション</p> <p>2. 文献講読 文献1 (金悠進『ポピュラー音楽と現代政治』)</p> <p>3. 文献講読 文献1 同上</p> <p>4. 文献講読 文献1 同上</p> <p>5. 文献講読 文献1 同上</p> <p>6. 映画鑑賞</p> <p>7. 小論文研究計画発表</p> <p>8. 文献講読 文献2 (平田晶子『ラオス山地民とラム歌謡』)</p> <p>9. 文献講読 文献2 同上</p> <p>10. 文献講読 文献2 同上</p> <p>11. 文献講読 文献2 同上</p> <p>12. 小論文口頭発表</p> <p>13. 小論文口頭発表</p> <p>14. 小論文草稿添削</p> <p>15. 小論文草稿添削</p>	
【履修条件】	<p>毎回の授業には、予習をしっかりと行うこと。</p> <p>Students should prepare well for each class.</p>	
【評価方法】	<p>授業態度 (ディスカッションへの参加、発言、映画感想文など) 40%</p> <p>口頭発表 20%</p> <p>小論文 40%</p> <p>Classroom attitude (participation in discussion, remarks, film report, etc.): 40%</p> <p>Oral presentation: 20%.</p> <p>Essay: 40%</p>	
【テキスト】	<p>金悠進『ポピュラー音楽と現代政治ーインドネシア 自律と依存の文化実践ー』(京都大学学術出版会 2023)</p> <p>平田晶子『ラオス山地民とラム歌謡ー内戦を生き抜いた宗教芸能実践の民族誌』(風響者 2023)</p>	
【参考書】	<p>Bart Barendregt and Peter Keppy. 2017. Popular Music in Southeast Asia: Banal Beats, Muted Histories. Amsterdam University Press.</p>	
【備考】	<p>テキストは、学生の研究テーマや関心によって、変更する場合がある。</p> <p>英文の参考文献は、講師が日訳を提供することもある。</p> <p>合理的配慮の必要な学生が受講する場合には、授業方法や評価において、柔軟に対応する。</p> <p>Textbooks are subject to change according to students' research topics and interests.</p>	

The instructor may provide Japanese translations of English-language references.  
Flexibility in teaching methods and evaluation will be provided for students with reasonable accommodation needs.

【社会人聴講生】	応相談	【科目等履修生】	応相談
----------	-----	----------	-----

【科目名】	日本思想史研究B	History of Japanese Thought B	
【開講時期】	2025年度後期		
【科目責任者】	木澤 景		
【担当教員】	木澤 景		
【授業の目的】	本研究科カリキュラム・ポリシーに定める「コースワーク」を主とする専門科目講座として、主として日本思想・日本文化の研究を目指す大学院生を対象に、学術的な文献理解能力、専門的知識の習得を目的とする。本講座では平安期日本仏教のいくつかの文献を題材に、正統的な仏教思想からの特殊性や仏教受容期の日本人の思考の痕跡をたどることを目指す。本講座を履修することで習得が期待される素養は次の二点である。①仏教漢文の原典資料を読み込み、テキストに対する向き合い方と、読みを深めるための補助的な方法について学ぶ。②専門性の高い内容を、いかに大きな歴史展開や問題枠組みに位置づけていくか、研究におけるマクロとミクロの視点の取り方を身につける。		
【授業の方法】	レクチャー形式。時間が許せば、追加調査の報告やディスカッション、派生的な題材の調査・提案などを行う。原典資料等はプリントで配布の上、復習用にユニパでも配信する。		
【授業展開】	<p>平安仏教研究②</p> <p>※以下は、履修者の興味関心や議論の展開によって変動する。</p> <p>平安仏教の「心」理解 一空海『秘蔵宝鑰』を読む</p> <p>第一回 ガイダンス（受講する上での連絡事項等の告知）</p> <p>第二回 『秘蔵宝鑰』について 序文</p> <p>第三回 「第一異生抵羊心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第四回 「第二愚童持齋心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第五回 中間まとめ①</p> <p>第六回 「第三嬰童無畏心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第七回 「第四唯蘊無我心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第八回 「第五抜業因種心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第九回 「第六他縁大乘心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第十回 中間まとめ②</p> <p>第十一回 「第七覺心不生心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第十二回 「第八一道無為心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第十三回 「第九極無自性心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第十四回 「第十秘密莊嚴心」（講義形式、時間が許せばゼミ形式でのディスカッション）</p> <p>第十五回 まとめ</p>		
【履修条件】	講義は日本語で行う。難易度の高いテーマ、テキストを扱うので、復習時における追加的な先行研究調査等は必ず必要となる。予習も含めて、時間を惜しまず意欲的にテキストを読み抜こうという気概のある参加者を歓迎する。強い意欲があり、当講座に費やす時間が確保できる場合は、当然のことながら異なる研究分野を専攻する者の履修も問題ない。やむをえない場合を除き、4回以上の欠席はレポート提出の権利を与えない。		
【評価方法】	期末レポート80%＋リアクション・ペーパー等からの聴講態度20%。		
【テキスト】	原典資料は毎回プリントにて配布する。		
【参考書】	加藤純隆他訳『空海「秘蔵宝鑰」 ころの底を知る手引き』角川ソフィア文庫 2010年 福田亮成訳注『空海コレクション 3 秘密曼荼羅十住心論 上』 『空海コレクション 4 秘密曼荼羅十住心論 下』ちくま学芸文庫 2013年		
【備考】			
【社会人聴講生】	応相談。事前に面接を課すので、開講前に木澤（kizawa@u-shizuoka-ken.ac.jp）までメールされた い。	【科目等履修生】	履修可。

【科目名】	日本政治外交研究ⅡB	Studies in Japanese Political DiplomacyⅡB
【開講時期】	2025年度後期	
【科目責任者】	森山優	
【担当教員】	森山優	
【授業の目的】	専門研究に必要な手続き・方法論を具体的に学ぶ 主な対象は担当教員の専門領域である日本の政治外交史（1930年代～40年代）だが、受講者の問題関心によっては、この限りではない 研究に必要な読解能力、批判能力、考察力、構築力、表現力を身につけることが目標である	
【授業の方法】	ゼミ形式をとり①主要文献や史料の講読と、②受講者の研究報告の二本だてで行なう 対面で実施する予定だが、感染状況により、遠隔に変更する可能性がある	
【授業展開】	最初の時間に、受講する学生の問題関心との調整を行なって決定。フレキシブルに対応する これまでの例では 筒井清忠編『昭和史講義』（ちくま新書、2015） 森山優『日本はなぜ開戦に踏み切ったか』（新潮社、2012） 添谷芳秀『日本外交と中国 1945～1972』（慶應義塾大学出版会、1995） クリスティアーネ・ハルツィヒほか『移民の歴史』（筑摩書房、2023） を講読し、履修者による修士論文構想発表も実施した スケジュールとしては 1 ガイダンス 2 文献講読1 現段階での研究の概観 3 文献講読2 先行研究との比較検討1 4 文献講読3 先行研究との比較検討2 5 受講者の修士論文構想発表1 6 受講者の修士論文構想発表2 7 文献講読4 必要資料の選定 8 文献講読5 必要資料の講読3-1 9 文献講読6 必要資料の講読3-2 10 文献講読7 必要資料の講読3-3 11 論文執筆の作法その1（概論） 12 論文執筆の作法その2（具体論） 13 論文執筆の作法その3（実践論） 14プレゼンテーションその1（概括的に） 15プレゼンテーションその2（具体的に） とする予定	
【履修条件】	特になし	
【評価方法】	受講者の報告の内容（事前準備、理解度、構築力）を全てとする	
【テキスト】	未定	
【参考書】	山内昌之他編『日本近現代史講義』中公新書2019 筒井清忠編『昭和史講義』軍人編、ちくま新書2018 々『昭和史講義』3、ちくま新書2017 々『昭和史講義』2、ちくま新書2016 々『昭和史講義』ちくま新書2015 森山優『日米開戦と情報戦』講談社2016 々『日本はなぜ開戦に踏み切ったか』新潮社2012	
【備考】		
【社会人聴講生】	可	【科目等履修生】 可